

やり直しのできる社会を！

# 新宿連絡会NEWS

2007.7.23

VOL. 46

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議  
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10  
関ビル106号 NPO新宿気付  
TEL.090-3818-3450 FAX.03-3373-9878  
<http://www.tokyohomeless.com>

## 走りながら

笠井和明

チラシであるとか、要望書であるとか、活動に迫られた文章しか書かなくなって久しい。元来活動屋なのだからそれが当たり前なのではあるが、胸の内のもやもやとした呻き声は、時たまこうして発散をしていかないと、はげ口が別の所に向かいそうで、怖い。

そうやって乱文を乱発しまくってはいるものの、それはそれで評論家のように思われてしまいそうで、これもまた居心地は悪い。

結局は人の不幸の上で成り立つ、どないしようもないこの連絡会がゴールの見えぬランナーであるのと同じに、迷走は迷走を呼び、徒に年を重ね、自らの不幸を自らで招いているかのようである。

07年も半年を過ぎた。13年目の新宿の夏もまたいつものように繰り返される。新宿の街に路上生活者が居る事が当たり前のよう、そこを毎朝通る働き人と同化し、彼、彼女等の日々の喜怒哀楽が営まれる。

この冬に実施された「ホームレスの実態に関する



全国調査」の「報告書」が、4月に公表された。全国で18,564名が目視された。東京においても4,690名がエントリーされた。平均年齢57.5歳「長期間路上生活している者の割合が増加している」と報告がされている。

この数字を鵜呑みする業界人はいないと思うが、その調査内容を読み進める度に暗澹たる気分に襲われる業界人はそんなには多くないことだろう。何故これほどまで路上は絶望の墓場のようになったのか？

5月には東京都保健福祉局が「東京ホームレス白書II」を公表した。施策を推進させるには東京都を立てなければならぬため表面上は冷静を装ってはいるものの、本音を云えば机を両手で叩きつけひっくり返したい程の代物であった。これほどまでの事をしていながら、何ひとつ解っていねえじゃねえか！

そんな背景の中、正義の味方面した連中が、あたかも「スクープ」を取ったかのような騒ぎ立て、何の自覚もなく貧しき者を利用し、食べ物にし、路上は何も変わらないどころか、日々の絶望を刻印していく。

自らの事を棚にあげれば、どいつもこいつもである。

「可哀想だから、どうにかしてあげて下さい。」そんな庶民の善意がこれほどまで空回りした事例を私は知らない。

歴史家はきっと、世間がホームレスに「慣れた」

時期を探り当てる事が仕事になるであろう。

「貧しき人々の不安やおのきの伝染はひたすら早く、ひたすら強い。そっとしておもらいたいものが、そっとしてもおけないとなると、もはや絶望的にもなる。そうやって悲劇は二乗にも、三乗にもなり、いずれ取り返しのつかない事態へと進展する。不吉にもそういう事を経験してきたのが西新宿の貧者の歴史である。あらゆる理屈はそこにはない。」(「露宿」17号「東京路上ふらり散歩」より)

5年前、同じ心境にあった頃の雑記である。今への予感でもあり、何ひとつ成長を遂げない路上の証である。

いやいやそうではないと、そりゃ自分を鼓舞したい。この5年の、無駄なあがきであったとしても、その成果を羅列もしたい。しかし、その虚しさを思うと、指に力は入らない。そう、所詮は無駄なあがきであったのである。それを承知に書き殴った方がよほど真実であり、よほど未来が見えてくるのではなからうか。

先日とあるシンポジウムで若年層の就労支援をNPOで実践している方と同席をした。とても明快な方で、ニートやフリーターと云う状況を深刻ぶって議論したり、おもしろおかしく報道しているこの社会の側にこそ、この問題の根っこはあると冷静に分析をしていた。いたって同感した。

若年層の方が失業率が高いと云う不可思議な現象が続くこの国の雇用動向は、「規格外」の人々の「働く場」の喪失、の反映とも言えよう。

最近では、自立支援とか就労支援は、その一本調子の様が色々な悪影響を派生させ、いたって劣勢ではあるが、かと云って「保護」が趨勢を占めているかと云えば、一般的な市民感情からすれば多数派にならない。物事の進行には必ずブレが生じるが、今は



その「過渡期」にあるのかも知れない。

誰が誰を支えるのか。どのように、どれほどの力で支えるのか。その方法論は端緒についたばかりである。旧来の金銭給付で事足りると云う時代は「多重債務者」と化したこの国では既に終わっている。

「コミュニティ能力」「社会適応力」等の言葉が就労支援の場で語られるようになって久しい。要は人間関係をうまくやんなきゃ、今の時代、仕事も続けられないよ、と云う事なのであるが、この能力は残念ながらなかなか開発されない。無口である事が男の美德とされた高倉健の時代を過ごした人々は尚更そうではあるが、ストレス社会と称される、極端に合理化された新たな競争社会の時代を暮らす若者もまたそのようである。

先日中央公園を歩いていたらどこかの企業の販売員と思われる20名程度の若者が順番に大声をあげて自己陶醉、集団陶醉の世界にはまっていた。こんな自己啓発セミナーまがいの事を常時やっていたら持たない企業とは、と思うと規格から外れればなしの私なんぞはそっとしたものである。ストレスは心の病を蔓延化させ、発病者の数も、また自殺者の数も記録的な数値をはじきだしている。「いじめ」は「しかと」につながり、現代人の心の闇は常軌を逸した犯罪などに顕在化する。

「窓際族」を安易に切り捨てて来た企業の責任云々の論はあるものの、だからと云って国際競争力と云うストレスを抱えこまれた企業も、その論理からギリギリの人材配置を止められない。中小零細企業ともなれば尚更である。下手をすれば一家心中である。

製造業が淘汰され、サービス業が都市の一大産業となり、単に物を買うだけなのにもかかわらず、やれ接客態度が、サービスがと、それが売り上げに響くものだから、「コミュニティ能力」は増々求められる。見てくれだけの都会の姿に似せ、労働者に課せられた要求はまるで上限を知らないかのようである。

しかし、それはなかなか開発されない。良く云えば自分の価値観(どんな価値観であろうか)を大事にする人々は必ずいるからである。また、世の中すべてが、何かを解りきったインテリだけで構成されている訳ではないからである。もちろん開発され、迎合できる人は幸せである。その意味で「コミュニティ能力」の開発はまったく無意味な事ではなく、「化ける」人は確かにいるのであるから、おおいにやるべきである。問題は、開発されなかった人々を「引きこもり」とか「就職困難者」とかに仕

立ててしまう事であり、結果的に知らず知らず社会的排除を助長させている事である。これは自立支援、就労支援全般に言える事である。日雇を常雇いに、非正規雇用を正規雇用に変えたからと云って、こういう問題は何も解消はしない。生存できない程の飢餓賃金であれば問題であるが、そうでない限り人々が働いて生きると云う事は普遍的な社会の姿である。より良い暮らしを望むのであれば必死に働き、ほどほどの暮らしを望むのであれば、ほどほどに働き、後は個々の生活力だけの問題である。

しかし、働けるのに（仕事はあるのに）、「働く場がない」「容易に見つからない」、と云う問題は深刻である。もちろん、圧倒的多数者は、妥協に妥協を重ねて食い扶持だけはあると思うのであるが、妥協にも限度はある。ぱらぱらとビルの屋上から人が飛び降りよう、ぱらぱらと市場から人は墮ちる。その結果、「ホームレス」になったり、「ニート」になったり、とありがたくもない烙印を授けられる。

要は遠くへ、遠くへ、逃げ出したいともなるのである。どちらが全うかと問われても、答えは窮する。

「やる気がない」路上生活者が増えた。とも先の実態調査では分析も出来る。誰が「やる気」をなくさせてしまったのかと云う点を省いたとしても、確かに現状から脱却しようとしなない人々の層が出来あがってしまったのは現場感覚から事実のようである。その中には既に自立支援事業を利用し、「失敗」した者、既に生活保護制度を利用し、「失敗」した者も多く含まれる。そんな人々は、いくら一般的な言葉で鼓舞したところで、まあびくとも動かない。

「あいつら働く気がねえんだよ」仲間の間ですら良く聞く話しである。聞けば炊き出しを転々と歩き、食をつなぎ、福祉事務所の法外援護を利用することがもはや日常となってしまった人々の群れである。炊き出しや法外援護を永遠の路上配食と思ってやっている団体や役所など皆無だと思うのではあるが、結果として長くやればやる程、逆手にとられ、上手な共犯関係が出来上がってしまうのも事実ではある。

もちろんそれが本当の事実だとしても、それをそのまま放って置いて良いのかと、云う問題が生ずる。絶望は伝染する事を私達は誰よりも良く知っている。東京都のように「意識改革」が必要、「継続的な粘り強い支援が必要」などと、呑気な御託を並べてもまったく意味がないこともまた知っている。

一つの答えは、「シェルター」と「働く場」の問題ではなかるうかと東京都にも要望は出している

ものの、彼らは「効率化」すなわち「対策の縮小」の事しか今頭になく何のリアクションもない。規格に乗れる人々への手厚い支援が少なからず出来たのであるから、それを持続しながら規格に乗れない人々への、実験的でも良いから施策方針を出さなければならない時期であることを認識していない。「やる気がない」人々をそのまま保護への道に案内するのではなく、少なからず「やる気を起こさせて」から、必要であれば保護を適用しなければ何の意味がないこともまた、理解していない。「走りながら」思考が止まってしまったと判断せざるを得ないのである。

東京都がこんな状態であるからでもあるが、「第3の働く場」作りは東京でも民間レベルでは実験的に実施されている。我が業界で言えば、NPOへの雇用、起業支援、公的就労、ビックイシュー等。いずれもさしたる生産性はないものの、そこでは一般の労働市場から烙印を押された人々が、生き生きと、または文句を云いながら働き、日々の食い扶持は稼げている（先の若者支援の現場でもベーカリー等を経営し、若年層の雇用確保をしていると云う）。

しかし、それらは未だ実験の域を出ず、安定性や資金力など、その規模と環境は需要に即してもあまりにも小さすぎる。

中川清先生が論じている「不況期の紙芝居」は、かつて最も注目した観点であり、『日本の都市下層』は今も私の本棚の中心にある書である。かつては貧しくとも食い扶持は政策の力ではなく、自らの力、そして庶民の生活力で勝ち取れた事に鼓舞されたものだが、その衝撃は今も少なからずは残っている。貧しくとも食いぶちが稼げる「働く場」作り。そのための環境さえ出来るのであれば、それこそ悪魔だろうが死神だろうが、誰と手を結んでも何ら惜しくないのではあるが。



国の施策で言えば、厚生労働省の「就労支援策のホームレス能力活用推進事業」が辛うじて起業支援の観点としてあがっており、一部では実施されているが、これも全国で10ヶ所程度の実施であり、有効な手段には未だ成りえていないし、東京では残念ながら未実施である。東京都で言えばこれら観点はまるでなく（畑違いの保健福祉局が施策の主導権を取りたいがためにその中心となっているからであるが）、コインロッカー事業（都立公園などにコインロッカーを設置し、その収益を元にロッカー清掃等の雇用を確保していく事業）の企画提案をし辛うじて実践させてはいるものの、腰に力が入らず、まるで仕方がなくやっていると言う体である。

社会の規格に迎合した「なんとか能力」だけが足りないために、一般就労が現状においては困難と言う人々の層がいる事は現場の誰もが薄々と感じている。これらの人々を一括して「やる気がない人々」とレッテルを貼って、あとは「意識」の問題だとして済まされる程、路上生活者の数は減ってははいない。しかし、それに目を向け、真摯に取り組もうとしたら「面倒な事」になる事も誰もが薄々感じている。だから、当面の策として、安易に生活保護に流し込もうと原則論を偉そうにかざし、結果、各福祉事務所の猛反発を呼び、入り口は尚、狭くなる。悪しきスパイラルである。

住宅も低家賃の住宅が少なく、またそれを開発しようとしてもしない。「都会には家が沢山あるのに住む家がない」

働く場の問題もまた同じで「景気も安定して仕事があるのに仕事の場がない」。

答えは見えているのに、この課題に取り組もうと誰も腰をあげない。

相変わらず、行き着く所は「屋根と仕事」なのである。

「第3の働く場」作りは、それこそ弱小NPOだけでは実験程度しか出来ない。そこに行政もかまなければならないし、企業も地域社会も多少なりとも協力してもらわなければならない。規格から外れた人々は世間には多くいる。規格から外れ、働き場を求めて転々としている人も老若男女問わず世間にはこれまた多くいる。起業支援の分野にもう一度光を当て、団塊世代云々だけではなく、自分の働く場を求めている人々こそがNPOでも協同組合でも何でもこしらえて、「再チャレンジ」でも「再起動」でも何でも良いから、もう一度、働き、稼ぎ、貧し

くとも、あばら屋でも、生きていける環境を作る事こそが、今、最も問われている社会問題なのではないのか。それはもはや、ホームレス問題でも、ニート問題でもない。ましてや惰民育成ではない、それこそ今日的な健全な社会のあり方ではないのか。さもなければ、ストレス社会から脱落した者は第2市民として烙印を押される、まるで漫画のような社会しかイメージができない。

格差や貧困が問題なのではない。格差がある社会の中で、貧困がある社会の中で、人々がどのように生きていけるのかこそが問題なのである。

誰が何と言おうと自立支援の考え方は決して間違っているわけではない。今問題になっているのは、その方法論であり、あまりにも一本調子過ぎるその運用問題である。

「背中をちょっと押す」支援こそ、「見事なゴールをアシスト」する支援こそが、若者もそうであるが、路上生活者への支援として全面展開（多角的に）されなければならないと思うのである。

「やる気のないホームレス」と「やる気のない若者」は、まったく良いコンビである。片や失う物など何一つなく、片や薔薇色の将来がその手にあるにもかかわらず、この社会の片隅にさえ、「働く場」が、自らを確認する「場」が、ない。

いつまでこの社会は、こんな事を続けているのか。

(了)



# 出来事 (2007.2 ~7)



## 東京マラソン新宿に来る

2月18日、オリンピック誘致のイベント「東京マラソン2007」が新宿中央公園、都庁周辺を出発地点に開催されました。当日はもちろん、1週間前から都庁周辺、中央公園周辺は戒厳体制。この周辺には多くの仲間がねぐらを構えており、悪影響が懸念されましたが、幸いにも周知が徹底されていたため、大きな混乱はなく、該当地域の仲間は、数日前から小屋や荷物の大移動。ところが前日から雨が降り出しこれまた大変。見学どころか、荷物が濡れないようにと一苦勞。そんな周辺の苦勞も知らずに3万人もの人が雨の中、走る、走る。終って見たら、年老いた仲間一人が行方不明。捜索するもどこかへ消えちゃった。後日判明したことに、雨の移動中、すべてころんで救急車で入院していたとのこと。それがきっかけに内蔵疾患の病気も見付き、今は生活保護を受給中。本人曰く「いや～、瓢箪から駒だね」。人騒がせなマラソンとじいさんであった。

.....

## 新宿区の厳冬期宿泊事業無事終了

昨年12月から毎週新宿福祉で入寮受付があった厳冬期無料宿泊事業が3月に終わりました。今期は巨大施設大田寮が閉鎖後の初の厳冬期でしたが、新宿区は千代田寮と荒川寮を併用すると言う荒技をかけ、おっちゃん達のニーズにこたえようと枠を賢明に確保。トータル247名の枠で募集。全受付で全て抽選と言う結果にはなりましたが、それでも当選した仲間は安心して、2週間の「暖かい部屋」に入って行きました。稼働率が悪いと言われている緊急一時保護センターですが、要は23区の福祉事務所が積極的に入れていないため。おっちゃん達は「施設が嫌い」な訳ではなく、新宿区のように気軽に入所できない構造にしている事が最大の問題なのです。「山谷に近いんだから、仕事に行けるようにすりゃいいのに」初めて荒川寮に行った仲間の感想です。

.....



## 連絡会花見の会は好天に恵まれ大盛況

3月31日、連絡会恒例の「花見の会」が新宿中央公園で開催されました。暖冬の影響で早く咲いてしまった桜の樹の下で200名のおっちゃん達が飲めや歌えやの大宴会。普段飲み慣れていない(?)ため、今年も若干一名が飲みすぎ、ひっくりかえり救急搬送。後に詰問すると「たいして飲んでなかったよ」。周辺の仲間に事情聴取すると「いやいや、7~8杯飲んでたね」と複数の証言。まったく「やれやれ」である。そんなハプニングも笑い話になるくらい、路上の春はほっとする季節です。



## 第13回新宿メーデーは雨の中250名が

5月1日、こちらも連絡会恒例の新宿メーデーが開催されました。早朝から小雨が降る中、それでも250名の新宿、池袋などの仲間が柏木公園に集まり、都庁に向けての大パレードを元気よく行いました（今回から分裂と相成ったため、東の山谷の団体は不参加でした）。ゴールデンウィークの谷間でも新宿を歩く多くの皆さんの注目を浴び、自信満々と云うか、気恥ずかしいと云うか、それでも「おいらのため」にとプラカード高く突き上げる仲間。普段は能天気な連中も、こう言う時だけは、本当に頼もしい連中です。都庁の前では代表団を送り、都の担当副参事等との交渉も行いました。大荒れとなった昨年の交渉とは打って変わって今年は紳士的な議論に。新宿連絡会は「何でも反対」の団体ではなく、行政に対して是々非々の立場なので、交渉の色合いもその都度変わるのであります。喧嘩して、おだてて、結果として実を取る交渉術はもはや、連絡会の十八番。交渉を経て、今後うまく事が進めばよいのですが。

支援者おらず、ほとんど仲間だらけのメーデーは、連絡会らしくて充実感たっぷりの一日でした。

## ホームレス全国支援ネット結成

5月3日、エル大阪での「設立準備会」に引き続き、6月9日ユートリアすみだでの「設立総会」「設立記念集会」にて、全国40団体が加盟した「ホームレス全国支援ネットワーク」が正式に発足しました。

東京、大阪、北九州の各地の仲間が声をあげ、議員立法として提出され全会派一致で採択され、制定された「ホームレス自立支援法」が施行され早5年。10年間の時限立法、そして5年後の見直しの規定がある法律故に、今年はその「見直し年」に当たります。そのため2度目の全国実態調査が既に1月各地で実施され、この夏から、過去5年の施策評価、そして今後5年間の方針が議論される段取りとなっております。こう言う情勢の中、自立支援法制定運動を担った各地の団体が再統合し、そして地方都市などこの間次々と発足している支援団体をも加え、全国規模の力により、見直し議論を民間、路上の側からリードすべく、今回「ホームレス全国ネット」が形成されました。

既に今年初頭から「見直し提言」の議論を開始し、総会においてはその「骨子案」を公表。各地

の意見を加筆、6月25日、厚生労働省社会援護局への提出行動、全議員への申し入れ、記者会見を実施しました。

法制定運動時のようなダイナミックな動きはありませんが、「自ら作ったものは自ら守る」。仲間の法律をより良きものにしていくためこれから地道な活動を続けていきたいと思っております。

全国ネットの「提言」などの情報は、ホームページ <http://homeless-net.org/> に記載してありますので、機会があれば一読を。





## 追悼～浅田のおばちゃん

常に連絡と共に新宿に居た浅田のおばちゃんが3月2日亡くなりました。享年67歳。中央公園の近くのアパートの中で倒れている所を発見され、誰にも別れを告げずそのまま逝ってしまいました。

苦勞の末に新宿に流れつき、西口地下広場のインフォメーション前、中央公園のちろりん村で仲間と共に過ごし、辛酸を舐め、そして借上げアパートで2年前ようやく福祉をもらい、それでも他の仲間が心配なのか、毎日中央公園で掃除をしたり、仲間とお喋りしたり、炊き出しにも毎回顔を出し、そこに居ないことが不思議な程、彼女は新宿の風景の中に溶け込んだ存在でした。

葬儀には郷里の弟さんを始め、旧知の仲間、支援者が多く集まり別れを惜しみました。静かな、そして小さな寝顔でした。最後の最後だけは幸せだったろうか？集まって涙を流すことしかできなくてゴメンね。あの世でも先に逝った仲間と一緒に、新宿の路上を見守っていて下さい。あの時の笑顔のままです。

## \*ボランティア募集中!\*

新宿炊出し (準備・片付け)

毎週日曜 午後6時より7時半

ところ 新宿中央公園ポケットパーク

池袋炊出し (準備・片付け)

第2、第4土曜 午後3時より5時

ところ 南池袋公園

医療相談会

第2日曜 午後7時より8時半

ところ 新宿中央公園ポケットパーク

第2日曜 午前10時より正午

ところ 戸山公園

パトロール (夜回り)

新宿駅周辺 毎日曜 午後7時半～

戸山公園 毎水曜 午後6時～

\*お問い合わせ先

090-3818-3450 (笠井) もしくは、

メールshinjuku@tokyohomeless.com



## 新宿連絡会

2007年2月～2007年6月

会計報告

物品カンパ、現金カンパ  
ありがとうございます  
ました。

収入)		支出)	
炊出部門寄付	85,388	炊出し事業費	259,978
越冬部門寄付	3,000	パトロール事業費	8,995
通信部門寄付	9,000	諸活動費	223,031
その他寄付	438,900	教宣事業費	84,141
事業収入	22,500	越冬事業費	74,685
借入金(繰越債務)	785,140	事務費	7,793
		文化娯楽事業費	89,913
		池袋関連事業費	40,000
		雑費	3,180
		返済金	552,212
合計)	1,343,928	合計)	1,343,928

引き続き現金カンパ、物品カンパを宜しくお願い致します。新宿連絡会は皆様方からの寄付を一円たりとも無駄なく仲間のために使い切ります。そのため現在赤字続きですが、借金をしてまでも仲間のための活動を維持し続けます。



# 第14回 新宿夏まつり

2007.8.11~12



8月11日(土) 前夜祭 午後5時より

追悼会、カラオケ大会、そうめん大会など

8月12日(日) 本祭 正午より

ゲーム大会、かき氷市、衣類放出、

午後6時より 特製弁当配布

午後7時より 納涼コンサート 盆踊りなど

○場所○

新宿中央公園「滝の広場」にて

主催/第14回新宿夏まつり実行委員会 090-3818-3450

●夏まつりカンパ、炊き出しカンパ 振込は、郵便振替口座「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.gambanpo.net/>「ガンバNPO」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけ、そこから寄付ご協力をお願いに入ってください。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

衣類、タオル、石けん、風呂券、米券、テレホンカードなど物品カンパ送付は、

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号NPO新宿気付 新宿連絡会 宛て

(平日9時~5時で受取が可能です) をお願いします。

●郵便振替口座が変更になりましたのでご注意を！●

新郵便振替口座は、00160-6-190947「新宿連絡会」です。